

英 語 科

Hearing, Speaking の指導と問題点

加藤 剛 高橋 恵 亮 倉田 有 邦
小幡 正 躬 松本 青 也

(I) 入門期における能力の

測定と動機づけ(中学)

入門期における音声面の指導がいかに大切なものであるかは言うまでもないが、40名以上のクラスの全員が常に自分の発音に対して関心を持ち、英語を正しく聞きとり正しい発音で話すことに興味を感じるようにするためには、その領域での正確な能力の測定と効果的な動機づけが行なわれなければならない。ここではそのために試みた次のような方法について、その問題点を探っていこうとするものである。

1. 測定方法

- a. 集団学習反応記録装置+OHP……………耳から聞いて理解する能力を測定する。

<方法例>

(OHPで歩いている男の子の絵を提示。ヘッドフォンからの声) Is he standing? — (答えを考える時間4秒) — One, Yes, he is. Two, Yes, he does. Three, No, he isn't. Four, No, he doesn't. Five, He's standing. Push the button. — (すぐに記録開始)

<長所>

- ・ 個々の生徒の反応を日本語を介在させず表示、分析、記録できる。
- ・ 小さな声でも同じ条件で聞ける。

<短所>

- ・ 選択肢が与えられた問題にしか使えない。

<生徒の感想>

- ・ クイズのようでおもしろく、やる気がでる。
- ・ カンニングしたり、押しもちがえたりする。

<今後の課題>

- ・ 受容能力の測定だけでなく、発表能力の測定にも使えないか。
- ・ 将来はVTRを取り入れて situation の設定を効果的に行ないたい。

- b. テープレコーダー……………英問英答をさせ瞬時の理解、構成能力を測定する。

<方法例>

1. (テープによる質問) Do you have a television? — (答える時間4秒) — How many brothers do you have? — (答える時間4秒)
2. (テープによる指示) 日曜日に教会に行くかどうかきいて下さい。 — (尋ねる時間5秒) — 先生の部屋の壁の色は何色かきいて下さい。 — (尋ねる時間6秒。生徒は教師の答えを手元の答案用紙に記入する。)

<長所>

- ・ 瞬時の反応能力が測定できる上に、頭の中であたふたと翻訳したりする時間がないので発表したいことを日本語を介在させないで直接英語で表現しようとする習慣をつけさせることができる。

<短所>

- ・ 1時間かけても1人あたり1分しかない。

<生徒の感想>

- ・ すぐ答えられるように文型をしっかりと覚えようと思う。
- ・ 英会話に近いから役立つと思う。
- ・ 日本語に訳して、又答えを英訳していたのではとても間にあわないことがわかった。
- ・ テープでやると不自然であがってしまう。

2. 動機づけ

- a. 個人別発音記録表+発音記号別単語分類表……………自分の発音のいい点、悪い点を知らせることで常に自分の発音に注意させ、目標を明確に自覚させる。

<方法例>

まず発音記号の発音の仕方を資料1のようなプリントを使って指導し、分類表(第1表)に新出単語を書き込ませながら繰り返し発音練習をさせる一方、授業中の生徒の発音や個人別面接テストで気付いた点を個人別カード(第2表)に記入して定期的に生徒に返して記録させる。

<長所>

- ・ 自分の発音の欠点が具体的にわかるので目標を明確にして練習できる。
- ・ 生徒はとかくローマ字を読むような調子で発音しようとするものだが、第1, 2表を使いながら単語の発音練習を繰り返すことで文字に影響されずに正しい発音を能率的に身につけることができる。

<短所>

- ・ 生徒の発音の欠点を授業中に記録することがなかなか難しく、時々個人別面接テストをしてまとめて記録しなければならない。

<生徒の感想>

- ・ 自分の発音のあいまいなことがよくわかった。
- ・ どういう発音を勉強したらいいかわかる。
- ・ この機会にはっきりわかった単語がある。
- ・ 自分では正しく読めると思っていたものでも実際にはだめだということがよくわかった。
- ・ 発音に対して真剣に取り組むようになった。

第1表 (分類表からの抜萃)

[æ]	hat, cap, bag, camera
[ə:r]	girl, pearl, nurse, word, church
[θ]	three, thank
[ð]	this, that, father
[f]	front, for, after
[v]	five, very, knives
[tʃ]	peach, French, picture
[dʒ]	Japanese, cage, gym

第2表 (個人別発音記録表からの抜萃)

[æ]	/	○	△	△	△	△	○
[ə:r]	△	△	△	△	△	○	
[θ]	/	/	△	○			
[ð]	/	△	△	△	○		
[f]	△	○	○	○	○	○	○
[v]	△	△	○	○	△		
[tʃ]	/	△	○	○	○		
[dʒ]	/	△	/	/	△	△	△

備考

/印は全くダメ

△印はもう少し改善したい

○印はうまい!

<今後の課題>

- ・ かぶせ音素をうまく記録する工夫はないものだ

ろうか。

- ・ 生徒の発音を評価する教師自身の能力に限界があるので、それをいかにして克服すればよいか。例えば多人数による評価も考えられるが。
- b. リピートカセットテープレコーダー…………… aの結果, 著しく発音の悪い者の指導に使う。

<方法例>

(テープに録音された native speaker の声)

Are Roy and Tom waiting at the bus stop?

— (リピートボタンを押して生徒が録音) —

(再び native speaker の声) — (生徒の声と比較) —

(再び native speaker の声) — (修正して再び録音。これをうまくなるまで何度も繰り返す。)

(play ボタンを押して次の文に進む)

<長所>

- ・ native speaker の発音と自分の発音を絶えず比較しながらおもしろく練習できる。
- ・ 生徒はかなり細かい点にまで気付く。
- ・ 使い方を教えておけば生徒にある程度任せておける。

<短所>

- ・ あくまでも個人用なので利用できる生徒に限られてしまう。

<生徒の感想>

- ・ 発音の違いがよくわかっていい。
- ・ 発音が良くなったことがはっきりわかってうれしい。

<今後の課題>

- ・ LLの各ブースに取りつけられれば理想的だが、それまではグループ学習のような形で授業に取り入れてみたい。

c. 歌による発音指導

<方法例>

まず歌をきかせて楽しい雰囲気を作る。2度きかせてから内容について質問し、再度きかせてから歌詞をプリントしたものを渡し、発音や語句の簡単な説明をしてから細かく区切って練習。最後に伴奏だけで各列, 男子, 女子とわけて歌わせる。

<長所>

- ・ 一定のリズム感を身につけさせることができる。
- ・ 個々の発音について速くなったからといってあいまいにならないよう訓練できる。
- ・ 楽しい雰囲気が発音の指導ができる。

<短所>

- ・ 個々に歌わせると生徒がいやがるので、一人一人の発音がわからない。

<生徒の感想>

- ・ おもしろく退屈しないで発音の練習ができる。
- ・ 歌がつまらない。
- ・ もっとあとで、もっといい歌を教えてほしい。

d. 外人講師との会話による刺激……………自分の英語が通じかどうかテストさせ、成功感、必要感を与えて強い動機づけをする。

<方法例>

1グループ5名、6分ずつ。前半は生徒からの質問、後半は講師からの質問。

<長所>

- ・ 本質に即した効果的な動機づけである。
- ・ 生徒は予想以上に色々なことを吸収する。

<生徒の感想>

- ・ これは大変いい、これからもっとやってほしい(大部分の生徒)
- ・ 思ったより発音がよくわかってうれしかった。
- ・ 自分の英語が通じてうれしかった。
- ・ 普通の日本人と同じように英語で話せるようになる。
- ・ 外人の顔を見てもみじろぎしなくなる。
- ・ 外人との作法が身につく。

資料 1

英語の発音

I 母音……のどを通して出てくる呼気が口で何のじやまも受けないできれいな音となって出たもの。

a. 前舌母音

- 〔i:〕 舌を少しこわばらせ、「いーだ」のイー
- 〔i〕 「え」の口と舌で「い」
- 〔e〕 「え」より少し口を大きく、強く、短かく、「えっ! 事故にあったって」
- 〔æ〕 「ア」の口で「え」。急にあごを落とす、人差し指と中指が入る位口をあける。ふまれたカエル。

b. 後舌母音

- 〔u〕 口先をとがらせて短かく「お」に近く「う」
- 〔u:〕 更に口を小さく、後舌をあげる。
- 〔ɔ〕 親指1本なめるぐらい、短く「お」(アメリカでは〔ɑ〕これは唇を丸めない)
- 〔ɔ:] 口の奥で唇を丸く突き出して「おー」, 「おー」よりは「あー」に近く聞こえる。
- 〔ɑ:] 口を大きくあけて奥の方から「あー」と長く発音。

c. 中舌母音(あまり意識しないで発音できる)

- 〔ə:] 口を横一文字にひき、鉛筆をくわえる位口をあけ、舌を少し浮かせて、「あ、い、う、え、お」のどの音ともわからないあいまいな音を出す。

〔ə〕 力を抜いて、軽くあいまいな音、無いと思つて発音すれば自然に出る。

〔ʌ〕 口の奥で短く「あ」、「あっ!」と「おっ!」の中間の音。

d. 二重母音

〔ei〕 〔e〕のあと軽く〔i〕ばらばらに発音しないこと。

〔ai〕 日本語の「あ」よりも口を大きく。

〔au〕 大丸→小丸

〔ou〕 「お」は日本語よりも唇を丸めて発音, 「う」を軽くそえる。水中の金魚の口。

〔ɔi〕 丸口→平口

〔ɔə〕 イギリスで〔ɔ:], アメリカで〔ɔ:r〕に代用。

〔iə〕 前舌をあげる〔i〕音から、あいまい音〔ə〕

〔eə〕 〔e〕は〔e〕と〔æ〕の中間音。東北弁の「そんなことはねえーだよ」

〔uə〕 「うぁ」と「おぁ」の中間音、唇を丸めて突き出した口→平らな口。

II 子音……口の中で舌や歯などの妨害をうけて発せられる音。

a. 破裂音

〔p〕, 〔b〕 吹き出す音。

〔t〕, 〔d〕 舌の先端を上歯の後ろに押しつけて急にはなした時に出る。

〔k〕, 〔g〕 舌の奥を口の奥の上側に押しつけて急にはなした時に出る。

b. 摩擦音(練習には長くのばしてみる)

〔f〕, 〔v〕 上歯でかるく下唇を押しつけてそのすき間から息を吹き出す。

〔θ〕, 〔ð〕 舌の先を平らにして上歯と下歯の間にはさみ、静かに「すー」と息を出す。

〔s〕, 〔z〕 舌の先を上歯の裏に近づけて、歯と舌のすき間で摩擦して呼気を鋭くはずませる。

〔ʃ〕, 〔ʒ〕 舌の前面部を上歯の後ろに向けて、そのすき間から強く息を出す。唇を丸く突き出し「シュシュ・ポッポ」

〔r〕 準備の口のかまちは「うどん」の「う」舌の先をまき上げて、そのすき間から声を出す、舌の先はどこにもふれない。

〔h〕 「はー」息で手をあたためる音。

c. 半母音

〔w〕 〔u〕よりもっと口を突き出し、すぼめる(息だけを出した音がアメリカでは〔hw〕)

〔j〕 〔i〕の口のかまえて中舌をうんと上げる。

d. 両側音

〔l〕 舌の前端を上歯の歯ぐきにしっかりとあてて離

高校における Hearing について (高校)

さず、その両側から声を出す。

e. 鼻音

〔m〕 〔b〕の口のかまえで鼻から息を出す。

〔n〕 〔d〕の口のかまえで鼻から息を出す。

〔ŋ〕 〔g〕の口のかまえで鼻から息を出す。

f. 破擦音

〔tʃ〕, 〔dʒ〕 〔t〕と〔ʃ〕を同時に発音, にごって
〔dʒ〕

〔ts〕, 〔dz〕 舌の先端を上歯の裏に強くあてて
「つ」, にごって〔dz〕

(II) 高校における Hearing について (高校)

英語教育において hearing・speaking の重視が叫ばれながら、大学入試の圧力、教師の能力の問題、施設・設備・機器の問題等もあって、hearing・speaking の指導はおろそかにされがちなのが一般の実状のようである。本校においてもその例にもれず、hearing・speaking 面の指導が不十分であったことを反省し、今回は hearing に重点を置いて指導を行なった。

1. Hearing を Speaking と一応切り離して指導

hearing と speaking とは互に密接な関係があるゆえ関連させて指導することが望ましいと思われる。しかし、hearing と speaking とは関連させなければ指導が成り立たないということはなく、前者を後者から切り離して指導することも必ずしも不当でないことを述べている書物もあり、ポイントをしぼるため、今回は一応切り離して、hearing に重点を置いた指導を試みた。(1)

2. 予備テスト

まず、指導の手がかりを得るために、1学期末に高1(一部高2)を対象として次のテストを実施した。

a. 教科書(中2)の英文を native speaker が吹き込んだテープを3回くりかえして聞かせ、その内容を日本語で書かせた。(「資料1」参照)

b. 単語の聴別テスト

3つの単語を聞かせ、その異同を聴別させるも

の。これは本校紀要第4集に発表したものをほぼ同じものであるが、今回は native speaker 吹き込みのテープを利用した。(「資料2」参照)

c. 教科書(中1～中3)から選んだ短文をプリントし、それに各自の intonation を例のような形で記入させた。(「資料3」参照)

Ex. Supper will be ready soon.

d. 上記cの短文を読ませ、テープに録音した。

3. 予備テストの結果

前記テストの結果、次のような点が主な困難点であることがわかった。これはほぼ予想されたことであるが、改めて確認することができた。

a. Speech の Speed について行けない

「テストa」で聞かせた英語は、「資料1」にあげたごとく、活字で読めば何の変哲もないごく平易な文章であり内容であるが、耳で聞いた場合には予想以上に理解がむづかしいようである。読む場合には、理解しにくい所はくりかえし読んだり、さかのぼって訳しあげたりできるが、聞く場合にはそれができない。ほぼ正確に大意をつかんだものは14%、部分的にししかつかんでいないもの25%、ほとんど全くつかんでいないものは実に61%であった。「英語はこんなに早く読むものとは思わなかった」とか「よくまああんなに早く読めるものだと感じた」という生徒の感想に代表されるように、ほとんどの生徒が speech の speed について行けず、極めて悪い結果であった。